障害者は「健気な人」、介助する人は「善意の塊」とは、われわれが「押し付けた像」だった。『こんな夜更けにバナナかよ』に登場する筋ジストロフィー患者の鹿野靖明さんは、世話してくれる人に命令する。人が「よかれ」と思ってしてくれることを拒否する。彼のむき出しの人間性が、障害者と健常者を映し出す。

連載
ぶっちゃけインタビュー 2

『こんな夜更けにバナナかよ』の著者、渡辺一史さんに聞く

「ワガママ」を生きる武器として

「ワガママ」な鹿野さんを、どう描くか

―第三四回サントリー学芸賞（※1）受賞、おめでとうございます。第一作『こんな夜更けにバナナかよ』に続いて、二作目『北の無人駅から』でも受賞されて、打率一〇〇%じゃないですか。

いや、たった二作しか出版していないので、一〇〇%は気恥ずかしい。

―その時の授賞式のスピーチで、『北の無人駅から』からは、都会から、中央から見た北海道じゃなくて北海道の人間から見た北海道を書きたかったって。それに重ねて、障害者も、健常者から見た障害者の話を出されましたね。

健常者が望む障害者像の投影にすぎないって言いました。

―そこのところを伺いたいと思うのですが、まず、渡辺さんの障害者イメージを変える鹿野さんと出会いを教えていただけますか。編集者の紹介とかいうことですが。

そうですね。筋ジストロフィーを患いながら、自立生活を送る鹿野さんをテーマにした本を出版する予定で、編集者といっしょに行きました。当初、編集者が考えていたのは、私が書いたような本格的なノンフィクションではなく、まったく違う企画でした。

―当初はどんな企画の本だったのですか。

鹿野さんとボランティアとの間で交わされていた「介助ノート」という連絡ノートがあったのですが、そこからおもしろい部分を抜粋して、そこにボランティアに書いてもらった体験談を集めて編集するという本でした。でも、私は「介助ノート」を借りて読んでみて、それをズラズラと並べただけでは、第三者には何のことだかよく伝わらない。身内は、喜ぶかもしれないけど、「介助ノート」の言葉の真意をしっかり伝えるには、鹿野さんやボランティア一人ひとりのキャラクターも含めて、彼らが置かれていた状況そのものを掘り下げなくては、意味のある本にはならないと思いました。